小学校・中学校国語科における敬語指導教材
―教材における「敬意」を中心に―

Honorific guidance teaching materials in elementary and junior high school language classes
―focusing on ‘respect’ in teaching materials―

原　田　大　樹
Hiroki Harada

1　はじめに

我が国における敬語指導は、敬語の指針や敬意表現指導指針において転換してきた。しかし、敬語そのものに対しての研究が進んでいるのにもかかわらず、学校教育における敬語指導は、大きく変化をしないまま現在に至っている。敬語とは、社会生活を営む中で重要なツールであり、相手を敬うという点において、日本の言語文化である。

2007年２月、文化審議会国語分科会が「敬語の指針」について文部科学大臣に答申した。これまでの敬語の種類を従来の３分類から５分類へとした。また、中央教育審議会の初等中等教育分科会は敬語に関して、次のような改善の基本方針を述べている。

> 敬語の指導については、人間関係を円滑にし、日常の言語生活を豊かにするため、相手や場に応じた言葉遣いが適切にできるようにすることを重視する。[1]

このように、相手意識・場面意識をもたせ、適切な敬語の使用を行うことを重視している。また、それらは、「人間関係を円滑に」するとともに「言語生活を豊かにする」ためであると述べられている。私たちの言語生活を振り返ってみると、人間関係を円滑にするために、使用する言語を変化させる。例えば、同じ方言話者間でのコミュニケーションの場合は、共通する方言で話したり、同世代の人間観でのコミュニケーションであれば、「タメ語」といわれる話者と相手が同じ地平に立った言葉を用いたりする。これらの言語使用に関しては、「上下親疎」の関係をとらえ、言葉を選択していると言われている。このように、「相手」や「場」を認知し、表現語彙を変化させながら話している。このとき、相手や場を認知するが、裏返せば、「自己」を相手や場の状況などから位置づけていることとなる。とりわけ、謙譲語においては、相手との関係性の中で、自己を相手の立っている地平よりも低い位置に位置づけることになる。「人間関係を円滑に」するためには、相手との関係性を捉えることはもちろんのことであるが、その一方で自己をどのように位置づけるのかということも重要であると考える。

では、学校教育においてどのように指導されようとしているのか。本稿では、小学校国語教科書、中学校国語教科書における敬語教材を検討することで、敬語指導の現状を捉えること、系統性を確認すること、敬語・敬意がどのように位置づけられているのかを検討することを主たる目的としている。

敬語そのものや敬語の運用に関する先行研究は、言語学分野、言語社会学分野において多く見られる。国語教育分野における敬語指導に関する先行研究は、管見の限り多くは見られない。例えば、宮本克之（2007[2]）、原田大樹（2011[3]）がある。宮本は、短大生を対象とした敬語表現教育の実践を踏まえた報告を行っている。原田は、敬語に関する答申等の史的変遷を踏まえ、敬語指導の現状として、教科書にみられる敬語指導教材の中から、敬語への変換活動に着目し

敬語指導の現状と課題を報告している。しかし、宮本は、「学校教育の現場からの発想による小学校、中学校、高等学校、大学に至るまでの体系的な敬語教育のカリキュラムを作成すること。」と敬語指導の系統性が不十分であることを指摘している。このような指摘を踏まえ、本稿では、義務教育段階での敬語指導の系統性を学習指導要領および、教科書教材から見ていきたい。また、先に述べたように、敬語・敬意というものがどのように位置づいているのかを見ていく。

2　小学校における敬語の取り扱い

（1）学習指導要領での位置づけ

まず、小学校における敬語の取り扱いについて検討していく。平成20年度版学習指導要領解説の中の国語科改訂の趣旨の具体的内容として、「(カ) 敬語の指導については、基本的な知識を理解し、実際の場面において使い慣れるようにすることを重視する。」と述べられ、敬語に関する基本的な知識を習得することと敬語を使用できるようにすることが具体的な改善点として挙げられている。また、学習指導要領では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中の「イ言葉の特徴やきまりに関する事項」、「言葉遣いに関する事項」に位置づけられている。年次配当としては、第１学年及び第２学年で「敬体で書かれた文章に慣れること」とされ、以下のような解説がなされている。

> 小学校に入学した児童は、これまで以上に、友達や教師、地域の人々など様々な人とかかわるようになる。相手や場に応じて、言葉の使い方が変わることを意識するとともに、敬体で書かれた文章にも接することになる。ここでは、そのような文章表現における相手や場に応じた適切な言葉遣いとして敬体で書かれた文章に慣れることを示している。[4]

このように、第一学年及び第二学年では、敬体の文章に慣れることが述べられている。また、言葉の使い方の変化について意識することが挙げられている。これらの指導に際し、「最初は、文末表現に注意させて読み慣れるようにし、漸次自分でも使い慣れるようにしていく。次第に常体の文章も出てくるので、敬体と常体との違いについての初歩的な理解ができるように指導することも必要である。」と述べられ、教科書を「読む」ことによって、敬体という話型を習得し、生活の中でも使用できるようにしていくことが必要であることがわかる。

次に、敬語が位置づけられている第５学年及び第６学年では、「日常よく使われる敬語の使い方に慣れること」とされている。この点に関して、解説では次のように述べられている。

> 丁寧な言葉の使い方については、中学年までの指導を受けて、高学年においては、相手と自分との関係を意識させながら、尊敬語や謙譲語をはじめ、丁寧な言い方などについて理解することが大切である。[5]

小学校中学年までの段階においては、あくまでも「丁寧な言い方」を日常生活でも使用できるようにし、高学年では、尊敬語・謙譲語・丁寧語などについての理解も求められている。また、「相手や場面に応じて適切に敬語を使うことに慣れるよう」しなければならないことも求められている。

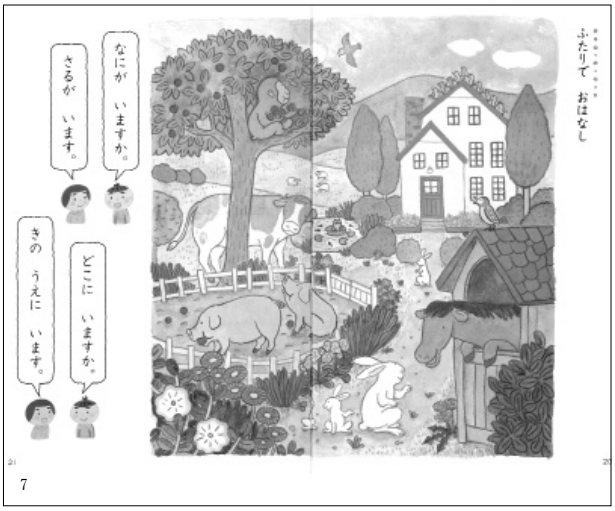
このように、学習指導要領では、小学校入学と同時に、丁寧な言い方から学び、日常生活においても使用できるようにし、高学年では、尊敬語・謙譲語・丁寧語などの理解へと系統立てられている。

（2）小学校国語科における敬語指導教材の現状

では、上記で見た、学習指導要領で位置づけられた敬語指導教材は、教科書にどのように反映されているのであろうか。

まず、第一学年及び第二学年において、先に見たように、「敬体で書かれた文章に慣れること」とされていることが確認できたが、「話型」として、学習者が敬体を使用するようになっているものが、次のようなものである。

これは、一年上の中の、「こんないしをみつけたよ」という教材である。石の形や色などの特徴を紹介するような教材である。領域的な視点で見ると、話すこと・聞くことの領域である。紹介する際には、「おむすびくんです。」や「にて　いるからです。」などのように、「です」という敬体が用いられている。想定される学習としては、この「です」という話型を使用した形で、見つけた石や好きなものなどを、他の学習者に発表するというようなものであろう。では、教科書の中で、初めて敬体の文が用いられている教材はどのようなものであろうか。以下で示すのは、一年上の中で、「ふたりでおはなし」という教材である。



教科書に提示されている絵を見ながら、二人で話す・聞く活動を行う。ここでは、「いますか。」「います。」という「ます」という敬体を用いて、二人で会話をするという教材である。

このように、入門期においてはペアでの対話を基本にしながら、「です・ます」といった話型を学習することになっている。これは、その後の学校生活、授業の発表の際に用いる最低限度のルールとして身につけてほしい話型として提示しているのではないだろうか。入門期の時期に対話活動で、敬体の第一歩を学習させようとしているのであろうと考えられる。

次に日常生活に関連させた敬語指導の単元を見てみる。次のようなものが見られる。

これは、「おみせやさんごっこ」という教材である。実際にお店屋さんとお客さんになって学習を進めるものである。ここでは「ありがとうございます。」「ください。」「ありますか。」「あります。」「いいですか。」という敬体が用いられている。

このように、小学校低学年においては、敬体の話型で、話す･聞く活動が教材となっていることがわかる。「敬体の文章に慣れる」ために教材文にも敬体話型が示され、それを用いて、発表や対話、ごっこ遊びなどを行うことで使うことに慣れさせようとしていることがわかる。それらが、日常の学校生活とりわけ授業中にも使用できるように、教室内に、発表分けなるものが掲示してある場面もみられるのである。

このように、小学校低学年では、主として、授業中に発表する際の話型として、敬体が使用されている。では、高学年では、どのような教材が見られるのか。以下に示すのは、小学校５年生の教材「敬語」である。

言葉

敬語

ある日曜日、ゆみ子さんの家にとなりの山田さんが来ました。お父さんに用があるそうなので、ゆみ子さんは、二階にいるお父さんに知らせました。

「お父さん、山田さんが来たよ。」

すると、お父さんに、

「『山田さんがいらっしゃった』と、言うほうがいいんだよ。」

と、注意されました。

わたしたち、聞き手や、会話の中に出てくる人などに対して敬意を表すために、必要に応じてていねいな言葉づかいをします。これを、敬語といいます。

《ていねい語》

あまり親しくない人や大勢の人に対して話したり書いたりするときは、「です」「ます」や、「ございます」などの言葉を使います。これらを、「ていねい語」といいます。相手（聞き手や読み手）に対する敬意を表します。

《尊敬語》

相手や話題になっている人をうやまう気持ちを表すときは、「尊敬語」を使います。尊敬語は、次のような種類に分けられます。

ア　特別な言葉を使った言い方。

・いらっしゃる（いる・来る・行く）

・おっしゃる（言う）

・くださる（くれる）　　など。

・いただく（食べる・もらう）　　など。

イ　「お（ご）――する」という言い方。

・お客様を、お見送りしましょう。

▼次の文は、どこを、どんな表現にしたらいいでしょう。そう考える理由も合わせて、話しましょう。

・先生は、今、職員室にいる。

・地域の人たちが、学習発表会を見に来てくれた。

・となりの山田さんに、おかしをもらった。

・校長先生にききたいことがあります。

▼あなたは、どんな相手に対して、どんなときに敬語を使っていますか。思い出して話しましょう。

大勢　職員室

76

イ　「お（ご）――になる」という言い方。

・校長先生がお話しになります。

ウ　「――れる（られる）」という言い方。

・先生は、もう帰られました。

エ　物事を表す言葉に「お」や「ご」を付けた言い方。

・ご卒業おめでとうございます。

《けんじょう語》

自分や身内の者の動作をけんそんして言うことによって、その動作を受ける人への敬意を表すときは、「けんじょう語」を使います。けんじょう語には、次のような種類があります。

ア　特別な言葉を使った言い方。

・うかがう（行く・たずねる・聞く）

268ページを見よう

勢　職

77

9

言葉

生活の中の敬語

敬語は、聞き手や、会話の中に出てくる人などに対して敬意を表すための、ていねいな言葉づかいです。

▼次の文で、敬語が使われているところに線を引きましょう。また、それぞれが、ていねい語・尊敬語・けんじょう語のどれに当たるかも考えてみましょう。

・郵便物を、机の上に置いておきます。

・校長先生が、そうおっしゃった。

・何時ごろいらっしゃいますか。

・展覧会には、もう行かれましたか。

・明後日、ご自宅にうかがいます。

・機械の操作方法は、私がご説明します。

・紅茶に砂糖をお入れになりますか。

日常生活の中で、敬語を使うのがふさわしい場面はいろいろあります。ここでは、みなさんが、実際に出会いそうな場面を取り上げています。適切な表現を確かめましょう。

▼次のそれぞれの表現は、どのように言いかえるとよいでしょう。

【家に来客があったとき】

・「いらっしゃい。今、お母さんを呼んでくる。ちょっと待っててください。」

・「あっ、お母さんは、今出かけてて。山田さんが来たって、言っておきます。」

【電話をかけたとき、受けたとき】

・「もしもし。同じクラスの中山だけど、しゅうた君は。」

敬語　郵便物　机　展覧会　自宅　操作　私　紅茶　明後日　砂糖

100

・「はい。…だれですか。…お父さんは、今、いません。帰ってきたら、山田さんに電話するように言います。」

【店で店員さんと話すとき】

・「カーネーション、三本ください。おばあちゃんにあげるから、リボンを付けてほしいんだけど。」

▼次のような場面では、どうでしょう。相手が、家族や友達のような身近な人でなければ、どんな言い方をするのがいいでしょう。

【食べ物や飲み物をすすめるとき】

・「どうぞ、食べて（飲んで）ください。」

・「クッキーを、もう少しどうですか。」

【もらった物のお礼を言うとき】

・「この間は、りんごをくれて、ありがとうございました。おいしく食べました。」

私たちが、話したり書いたりする言葉は、単に内容を伝えるだけのものではありません。その人が、相手や話題になっている人物をどう思っているのかという気持ちや、その場をどうとらえているかという見方も表します。

生活の中のちょっとした場面でも、相手と場を意識して、適切な敬語が使えるといいですね。

敬　郵　机　覧　宅　操　私　紅　砂　糖

269ページを見よう

101

10

低学年の教材と異なり、敬語に関する定義、分類、例文が示されている。

敬語の定義としては、「聞き手や、会話の中に出てくる人などに対して敬意を表すために、必要に応じてていねいな言葉づかいをします。これを敬語といいます。」とされている。分類としては、従来の３分類に基づいており、「ていねい語」「尊敬語」「けんじょう語」という順で提示されている。それぞれの分類された敬語の定義は次のようにまとめられる。

ていねい語	あまり親しくない人や大勢の人に対して話したり書いたりするときの「です」「ます」「ございます」のこと。 相手に対する敬意を表す
尊敬語	相手や話題になっている人をうやまう気持ちを表すときに使用。
けんじょう語	自分や身内の者の動作をけんそんして言うことによってその動作を受ける人への敬意を表す。

文化審議会「敬語の指針」で示された5分類ではなく、従来の3分類が教材の内容である。 このような分類・定義が示された後に、どのように言い換えるかという課題が4つほど提示されている。次に、第6学年の教材を見てみる。「生活の中の敬語」である。

この教材は、日常生活の中のどんな場面で、どのような敬語を使用すればよいのかを考えるものである。具体的な場面における例文をそれぞれ示しており、その例文の一部分を敬語に言い換えるようになっている。

以上、小学校における敬語指導教材を見てきた。低学年においては、日常の学習場面での発表の話型を、「です・ます」を中心に教材化されていた。高学年になると、敬語の3分類に即して、敬語の体系的な知識が示されている。そしてその後、「どのように変えるか」といった言い換えの課題が示されている。小学校6年生の教材になると、日常生活の中で敬語を使用する具体的な場面が5場面示され、言い換えるような教材となっていた。すべてが、技術的に敬語に変換する教材となっていることが指摘でき、敬意に関する文言はないことがわかる。

3　中学校における敬語の取り扱い

（1）学習指導要領での位置づけ

次に、中学校学習指導要領国語科編で、敬語がどのように位置づいているのかを見ていく。小学校と同様に、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項「（イ）言葉の特徴やきまりに関する事項」に示されている。その中の、「言葉の働きや特徴、言葉遣いに関する事項」の第二学年では、「（ア）話しことばと書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。」、第三学年では、「（ア）時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いを理解するとともに、敬語を社会生活の中で適切に使うこと。」とされている。第二学年の文言について、小学校からの系統性に鑑み、次のように解説が書かれている。

敬語については、小学校第5学年及び第6学年において、「日常よく使われる敬語の使い方に慣れる」よう指導している。中学校においては、個別的・体験的な知識を整理して体系付けるとともに、人間関係の形成や維持における敬語のもつ働きを十分に理解させる必要がある。指導に当たっては、基本となる尊敬語・謙譲語・丁寧語について理解させるようにする。なお、文化審議会答申「敬語の指針」に示されている尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ（丁重語）、丁寧語、美化語の5種類については、生徒の実態に応じて取り上げることも考えられる。[11]

小学校で得た敬語表現に「慣れる」ことから、体験的に得た知識を体系化して整理していくことが中学校における敬語の取り扱い方であると言える。また、指導の際、人間関係の形成や維持のために敬語の働きを理解させることが肝要であると述べられている。その際、取り扱う敬語の種類は、尊敬語、謙譲語、丁寧語を中心として、5分類は、実態に合わせて指導するように記されている。次に第3学年の文言を見てみる。

敬語については、第2学年までの指導を踏まえ、社会生活の中で、相手や場面に応じて、適切に使い分けられることができるよう指導する必要がある。その際、敬語は国語の歴史の中で一貫して重要な役割を担い続けていること、相手や周囲の人と自らとの人間関係・社会関係についての気持ちを表現する役割があることについて配慮することも大切である。また、「A話すこと・聞くこと」（1）の「イ

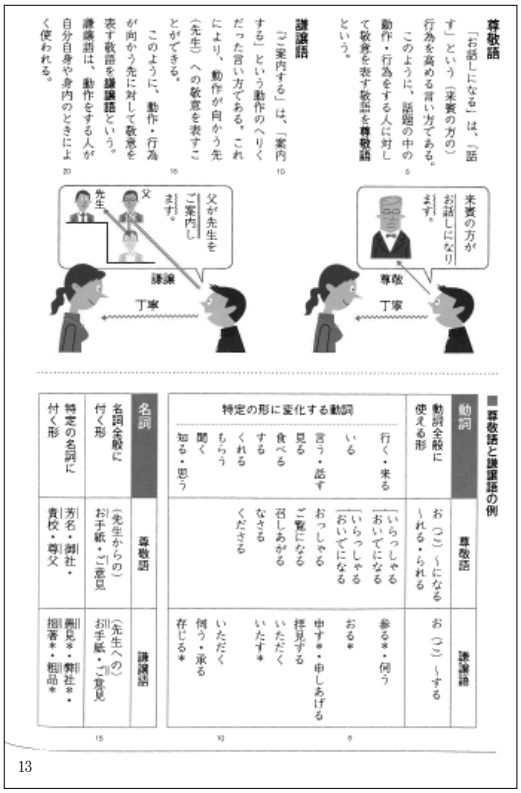
場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使うこと。」と関連させて指導することが大切である。[12]

第３学年においては、これまでの学習を踏まえたうえで、適切な使い分けができるよう指導することとされている。

（２）中学校国語科における敬語指導教材の現状

では、中学校国語教科書に掲載されている敬語指導教材について見ていく。

中学校の教材では、小学校段階で開設されていた３分類の敬語が、それぞれ詳細に解説されている。その後以下のような、自己と相手の位置を示す図と尊敬語・謙譲語のうち、「特定の語に変化する動詞」が表で示されている。



このように、敬語の知識が体系化されて示されているのである。とりわけ、会話中に出てくる人物に対する尊敬表現、謙譲表現を例として挙げている。二人称、つまり話の相手に対する尊敬表現や、話の相手に対する謙譲表現に関する図は示されていないことがわかる。また、「文法の窓」のような小単元として、一

種のゲームのような形で、上記の「特定の語に変化する動詞」を学ばせるものもみられる。

以上のように、中学校における敬語指導教材は、敬語の基本的知識を与えることが中心となっている。また、小学校における敬語指導教材と同様に「敬意」に関する文言は出てきていない。

４　小学校・中学校における敬語指導教材にみる系統性～「敬語」「敬意」について～

以上、小学校、中学校における敬語指導についての学習指導要領および、教科書教材について見てきた。

学習指導要領上では、小学校低学年の丁寧な言い方で敬語に慣れることを経て、小学校高学年において、敬語の種類を学習することとなっている。中学校では、第２学年では、体験的に得た知識の体系化と整理が学習され、第３学年では、適切に使い分けることとなっている。

それらを教科書教材で見てみると、小学校低学年では、話型として丁寧な言い方が出てきており、それを真似するような活動を通して慣れさせるような構成となっている。そのような丁寧な言い方は、おそらく、

学習活動の場で、発表話型としても指導され、身についていくものと考えられる。その後、小学校高学年においては、敬語の3分類とそれらの定義、そして、それぞれにどのような言い回しがあるかを紹介するような形で教材が構成されていた。中学校になると、敬語に関する解説が詳細になり、体系化された敬語の知識が載せられている。また、「文法の窓」なる小単元で、言い換えるものもみられた。

このように、義務教育段階における敬語指導、教材を見てみると、おおよそ、日常生活で慣れることにはじまり、敬語の知識が段階を追って提示され、最終的に使い分けを行うような発展を見せていることがわかる。

しかし、これらの一連の敬語指導の流れは、敬語そのものの価値、コミュニケーションの一つのツールであるという視点から捉えなおせば、果たして、ツールとして使用できる状態になるまでの指導になっているだろうかと疑問に感じる面がある。すなわち、敬語の使い分けが中学校第3学年にあるだけで、小学校高学年、中学校第2学年では、「使用」に関しての指導が希薄であることが指摘できる。また、先にも述べた通り、技術的に敬語へ「言い換え」ることができるようになることは、本当の意味で、「敬意」を学ぶことになるのであろうか。このような敬語指導のあり方に関連して、望月善次（2007）は「原則は確認しながらも、緩やかな適用を！根底に敬意があれば、誤用にも目くじらを立てずに！[15]」と述べている。つまり、「敬語」指導に関して、その基本を押さえながらも、その根底にある「敬意」を育むような指導のあり方を提言しているのである。言語学者であり敬語研究の第一人者である菊池康人も次のように述べている。

> かりにぎこちない会釈や野暮な「やあ！」でも真心が伝わりさえすれば好感がもてるように、敬語や言葉遣いも、多少スマートでなかったり不適切だったりしても、十分に真心が感じられる場合には、多めに見たいという気になるものである。[16]

このように、国語教育分野においても、言語学分野においても、敬語の指導は、「敬語」そのものの指導よりも根底にある「敬意」とその敬意をどのように表すかという敬意表現の二つの指導が重要であると述べられている。この点に関し、原田（2011）でも「知識としての敬語の指導、そして、それを使用できるような指導が望まれている。換言すれば、ただ、知識として敬語の体系を指導するだけではなく、それを実生活に使用できる、コミュニケーションという実際の場面で使用できるということが必要である。[17]」と述べており、現在の敬語の指導は、知識中心となっており、「使用」の指導を増やす必要があることを指摘している。このように、根底にある「敬意」の表し方の一つのツールとしての敬語の指導という視点に立たなければ、単なる言語文化としての「敬語」、「敬意」なき「敬語」の指導になってしまうのではないだろうか。

5　おわりに～まとめにかえて～

以上、小学校から中学校における敬語指導教材について、学習指導要領、教科書教材を中心に見てきた。

敬語の指導は、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項に含まれながら、話すこと、書くことにも関連がある事項である。また、社会問題ともなっている人間関係の構築・維持などにおおきく影響する敬意表現の指導は、適切に、実際的に行われなければならないと考える。また、実際の教材については、小学校・中学校において系統性が認められる。しかし、それは、あくまでも知識体系としての系統性である。適切な敬語使用、敬意表現指導としての敬語指導を成立させるためには、敬意表現としての敬語という位置付けを再確認し、単なる知識的な指導にならないよう実際的な指導も充実させながら指導を展開していくことが求められる。

また、課題として、宮本も述べているように、敬語指導に関して系統立ててカリキュラムを作成し、良好な人間関係構築・維持のための敬意の表現の仕方、その中の敬語という観点で具体的な指導内容・指導方法を考えていく必要がある。さらに、現行の教科書教材を用いて、敬語がどのように指導されているのか、具体的な実践例を挙げながら、その効果について検証を進めていく必要があると考える。

注

1　中央教育審議会答申
2　宮本克之（2007）「敬語表現教育に関する考察―学生の敬語使用と敬語指導の方法を中心に―」『全国大学国語教育学会発表要旨集』vol.113、pp.131 ～ 134
3　原田大樹（2011）「敬語指導の現状と課題―小学校国語科を中心に―」『日本教科教育学会誌』34号、pp.21 ～ 30
4　小学校学習指導要領解説国語科編 p.46
5　4 に同じ、p.97
6　『こくご　一上　かざぐるま』p.57、光村図書
7　6 に同じ、pp.20 ～ 21
8　『こくご　一下　ともだち』pp.66 ～ 67
9　『国語　五　銀河』pp.76 ～ 77
10　『国語　六　創造』pp.100 ～ 101
11　中学校学習指導要領解説国語科編 p.60
12　中学校学習指導要領解説国語科編 p.77
13　『国語 2 』p.126、光村図書
14　『新編　新しい国語 2 』p.30、東京書籍
15　望月善次（2007）「二つの基本的留意点と具体的な方途としての「型」からの習得の提唱」『教育科学国語教育』、p.6
16　菊池康人（1997）『敬語』p.430
17　原田（2011）、p.28